

## 初等教育教員養成課程における器楽技能をめぐる一考察

－学生のピアノ実技に関する「困りごと」意識と実態－

### A Study on Keyboard Skills in the Primary Education Teacher's Training Course

－The Students' Problem and Actual Situation of Instrumental Skills and Music Literacy－

山本 美紀

Miki YAMAMOTO

#### 要旨 (Abstract)

本研究は、本学で初めて行ったピアノ技能をめぐるアンケート調査に基づき、ピアノ技能習得について本学学生の抱える課題を明確化しようとするものである。研究過程において、先行研究での結果との比較検討を行い、現在の学生のピアノ技術習得に関わる実態と「困りごと」を明らかにすることも研究目的に含む。ピアノの実技に関しては、実習では真っ先に指摘される技能である一方で、教員採用試験では、昨今の人材確保の難しさから、ピアノの実技試験を採用試験科目から除外したり、選択制にしたりする自治体も増えてきている。学生の側にとっても力の入れ方を苦慮するものであると言えるよう。そのような中、多くの学生が、ピアノ実技についての不安を口にする。

学生の練習状況のアンケートからは、①練習時間が特別少ないわけではない事、②練習をまとめてする傾向にあるなど、複数免許取得を前提とした教員養成課程の学生の忙しい日常生活や、ピアノ練習の課題など、先行研究で実施されたアンケートとの共通点が確認された。さらに、学生からの日常的な意見をも踏まえつつ、アンケート結果によって改めて確認できたのは、①音楽系実技に関わる担当者と現代の学生との、技能面における理解の齟齬、②学生の置かれている時間や場を含めた環境の限界、③現行の教員養成課程の課題、といったものであった。

英会話やプログラミング学習といった新しい学びが進む中にあっても、音楽が、人間が根源的に持つ、自他とのコミュニケーションツールである限り、今後も音楽科教育の重要性は変わらない。しかし、時代の流れの速さが指摘されて久しい現代にあって、ピアノ技術と音楽科授業、また教員養成課程における学生の取り組みについては、再考の時期を迎えていると思われる。

キーワード：(教員養成) (初等音楽) (器楽演習) (ピアノ技能) (練習実態)

#### I. はじめに

幼稚園教諭をはじめ、初等教育に携わるにあたっては、「ピアノの技能は、必要不可欠」という暗黙の前提がある。この前提について、『幼稚園教育要領』や『学習指導要領』を引き合いに出す必要はない。「ピアノの技能が必要」とは、どこにも書いていないからだ。しかし、昨今の少子化の影響や、都市と都市部以外の人材確保の難しさから、

採用試験にあたって「ピアノの弾き歌い」などピアノの実技試験を採用試験科目から除外したり、選択制にしたりする自治体が増えてきた<sup>1)</sup>。この傾向は、小学校のみならず、小学校よりもピアノを使用する頻度が多い保育園や幼稚園においても、今後も徐々に広がっていくと考えられる。人材の確保が何よりも必要とされる一方で、複雑化する教育現場において、ピアノの技能の高さが、必ずしも現場のニーズに応えられる力を十分に持つ保証にはならないからだ。明らかなことは、ピアノの技能が、1. 『教育指導要覧』にも『教育指導要領』にも明確な必須要件として書かれているわけではない、2. 今まさに大きく変化しようとする初等教育の教育現場で必要とされる人材の必須要件の上位に必ずしも位置づけられない、ということである。

このような現実の中で、いくら「初等教育の現場では、ピアノが弾けなければならない」と言われても、説得力がないのは明白である。何より、小学校教員試験でピアノ技能は、一番に採用試験科目から除外される可能性の高い科目である。人材確保に苦戦する自治体の足下を見れば、少々ピアノの技能が不足していても（時には全く無くても）乗り切れるのではないかと考える学生が出てくることは、容易に考えられる。

しかし、この「ピアノの実技試験は行わない」あるいは「選択制にする」判断をする自治体には、自治体なりの言い分があって、「(体育や音楽は) 大学などで教員免許を取得する過程である程度学ぶので影響は少ない。」<sup>2)</sup> とする。つまり、大学での教育課程科目である程度やっているはずだから、あとは現場で訓練するから大丈夫だとするのである。高等教育の現場で、教職課程科目のなかでも技能に関わる教員が、この意見に果たしてどれほど頷けるのだろうか。つまり、大学の学期中にある器楽演習等の授業だけで、ピアノを弾いて教育する場に対応できる力に相当する、あるいはそれを支える基礎力が付くと言えるだろうか。予め言うておくが、大学での教育課程やそこでの教育が不十分と言っているのではない。あくまで、現実的な、現場の話を率直にしているのである。そのような学生がどれほどいるだろうか。

確かに、幼稚園や保育園では何かとピアノを弾く機会があるだろう。実際、実習で学生や大学側に指摘されることの筆頭は、「ピアノが弾けない」である。ピアノは「弾けるか弾けないか」が明確であるのに加え、「ピアノくらい本人が(大学で) しっかり準備して欲しい」と考えられていることは想像に難くない。しかし、この保育園・幼稚園の現場で必要とされる「ピアノの力」も、今後変わってくることも考えられる。

本論で扱うのは、教育現場での必要性、採用試験の必要性で、必ずしも上位に来るとは限らないにもかかわらず、それでも少なからぬ学生が苦戦を強いられるピアノ技能についての、学生の実態である。ここでの議論では、「ピアノは必要」という前提は取らない。何度も確認するが、ピアノが必要であるとするのは教育方法論の一つの主張であって、たとえ保育園や幼稚園であっても「(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう」<sup>3)</sup> のに、ピアノを前提とするわけではないからだ。とはいえ、現在の初等教育現場では依

<sup>1)</sup> 「熊本県教育委員会は、今夏に実施する2020年度教員採用試験から、小学校教諭などの実技試験(体育、音楽)を廃止することを決めた。」「小学教員採用の体育・音楽実技を廃止 熊本県教委 志願者増を狙う」『西日本新聞』, 2019年1月25日6時39分。<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/481777/> (2019年12月29日閲覧)

「遠方からの受験者に配慮し、採用までに行う試験の日数を5日間から4日間に減らすほか、小学校の教員試験で「水泳」「オルガン」「体育」の3つの実技試験すべてが必須だったのを、1つを選択する方式に変更しました。」「教員採用試験 受けやすく見直し」2019年12月29日 06時00分, 関西NEWS WEB, NHK NEWS WEB, <https://www3.nhk.or.jp/kansai-news/20191229/2000023836.html> (2019年12月29日閲覧)

「都道府県教育委員会などが2018年度に実施した公立小学校の教員採用試験で、競争率の全国平均は2.8倍となり、バブル景気の影響で民間就職が好調だった1991年度と並び、過去最低だったことが23日、文部科学省の調査で分かった。」「小学校教員の採用、競争率2.8倍で最低 バブル期並み」『日経新聞』2019年12月24日朝刊, 38面。

<sup>2)</sup> 「小学教員採用の体育・音楽実技を廃止 熊本県教委 志願者増を狙う」『西日本新聞』, 2019年1月25日6時39分。<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/481777/> (2019年12月29日閲覧)。

<sup>3)</sup> 文部科学省「表現3内容の取り扱い(6)」『幼稚園教育要領』9頁, 2017年。

然として、「ピアノ」が日々の活動を主導している様子がうかがえる。それら「現行の」初等教育の場でのピアノのニーズを確認すると共に、学生の「ピアノ技能」をめぐる現状を明らかにし、「音楽科指導法」や「子どもと表現（音楽）」、「器楽演習」といった音楽技能を扱う授業において、高等教育期間での方向性を探る出発点としたい。

## II. アンケート調査

### i. 調査方法

#### i) 調査対象者

本学人間教育学部学生の中で、免許取得対象校種が実技を必要とする学生のうち、2019年度後期「楽典」「音楽科指導法」「子どもと表現（音楽）」受講者1～3年生121名。授業を重複して履修中の学生は、どれか1つの授業内でアンケートに参加。

#### ii) 調査期間

2019年12月10日及び11日に実施。

#### iii) 調査方法

アンケート用紙を配布。順次、アンケート及び各質問の趣旨を説明しつつ、答えを記入。

#### iv) 質問内容

##### (i) 回答者について

- ①学年
- ②取得希望免許・資格
- ③学校以外での稽古事経験の有無と年齢

##### (ii) ピアノ実技に関する履修状況

- ④器楽演習を履修経験
- ⑤未履修者の理由
- ⑥器楽演習以外でのピアノ実技に関する授業状況

##### (iii) ピアノの練習状況

- ⑦ピアノに関する授業の有無と練習時間への影響
- ⑧ピアノの練習時間の状況
- ⑨練習1回あたりの時間と場所
- ⑩練習のモチベーション
- ⑪練習しない理由
- ⑫ピアノ実技の状態への関心・意欲
- ⑬⑫の理由

##### (iv) ピアノ実技に関する支援について

- ⑭ピアノ技術向上のための、大学からの支援希望の有無とそれぞれの理由

##### (v) ピアノ実技に関する自由記述

- ⑮実技についての自由意見

なお、調査に当たっては、本調査が成績に影響するものではないこと、また、答えたくないものについては答

えなくても良いこと、無記名であること、調査結果について目的意外には使用しないこと、個人が特定される恐れのある内容は記載しないことを口頭で説明し、実施した。

## ii. アンケート結果

上記のようなアンケートによる結果から、本学学生の実態について見ていこう。

### i) 回答者について：質問③より

学校以外での稽古事経験の有無では、答えた学生うち5名を除く116名が、学校外での何らかの稽古事の経験を持っている。選択肢であげたのは、ピアノの他に 英会話、水泳、体操、そろばんや塾などであったが、これ以外にも合気道や習字、ヒップホップダンスなど、幅広い経験を学校外で積んでいることがわかる。稽古事に通った経験のある116名のうち、学校外でピアノやエレクトーン（音楽教室）など鍵盤系実技のレッスンを受けた経験のある者が53名と確認される。これは、アンケートを採った学生121人のうち43パーセントにあたり、先行研究における同種のアンケート（市橋・安田2017, 56-57）<sup>4)</sup>と比較してみると、15パーセント程度低い数値となっている。

### ii) ピアノ実技に係る履修状況について：質問④⑤⑥より

器楽演習を履修した経験はアンケートに回答した全学生が持っている。しかし、その中には、例えば1年生の場合、前期は履修したが後期は履修していない、2・3年生の場合も以前履修していて、現在は履修していない学生が多い。その理由について、表にまとめると、以下のようにになっている。

表1：器楽演習を履修しない理由（複数回答可）

	1年生	2年生	3年生	合計
時間が無い	0	5	6	11
単位のキャップ制に引っかかる	24	5	4	33
興味がない	0	7	0	7
必要がない	0	7	0	7
その他	0	6	0	6

各学年の背景を述べておく。1年生は、幼稚園教諭を主免許とする学生で、小学校教諭を主免許とする学生に比べ、ピアノを必要と認識する意識が強い。前期は履修の際に「器楽表現Ⅰ」を履修する指導を受けているので、全員がピアノ履修者であるが、後期は単位のキャップ制の制限から履修できていない。また、カリキュラムに設定されている授業で、器楽演習以外でピアノが必要となるものは、音楽専修コースの「音楽表現ⅠA」、幼保専修を中心とした「子どもと表現（音楽）」の2科目であった。

### iii) ピアノの練習状況について：質問⑦～質問⑨より

質問⑦ピアノに係る授業の有無と練習時間との影響では、かなり影響があると答えた学生が圧倒的に多い。このことから、授業があることが、学生の練習を促す契機となっていることがわかる。

<sup>4)</sup> 同大学アンケート結果では、回答者105名のうちピアノ経験者は68名であり、これは約65パーセントにあたる。

表2：授業の有無による練習時間への影響

	1年生	2年生	3年生	合計
かなりある	17	35	11	63
それほどない	9	17	11	37
ない	3	8	1	12

また、質問⑧1週間あたりの練習回数は、3回以上やる学生も多いものの、「テスト前のみ」と答えた学生が多く、この答えは現在、ピアノに関する授業を受講していないことも影響していると考えられる。「テスト前のみ」との答えには、筆者が担当する幼保向け授業内で「弾き歌い」を課題としてあげている影響と考えられる。

表3：1週間あたりの練習回数

	1年生	2年生	3年生
週に1回	6	11	5
週に2回	8	5	3
週に3以上	11	13	4
テスト前のみ	8	13	11

質問⑨は、それでは1回あたりの練習時間はどれくらいなものなのか、確認したものである。これを見ると、「1時間以上」と答えた学生が最も多く、コンスタントに日々練習することはせず、1回の練習でまとめて長時間やっていることがわかる。

同じく質問⑨で聞いている練習場所は、自宅と並び大学も練習場所として学生が利用していることが示されている。本学学生は、複数免許の取得による必須科目の多さから、空きコマが少ない中で、テストなど必要な場合は、隙間を見つけて練習している様子がわかる。

このような、練習時間や場所については、先行研究と大きな開きはない（市橋・安田2017, 57）。「週2回以上4回未満」が41パーセントと最も多く、「週1回」「授業のみ」という学生が50.4パーセントと続く。また、「1時間以上」「30分以上1時間未満」の合計が49.5パーセント、そのうち28.8が「週1回」ということなので、本学と同様、1回の練習をまとめて長くとる、という傾向が見られる。

表4：練習場所

	1年生	2年生	3年生
自宅	8	19	3
大学	12	11	6
自宅と大学	11	10	12
その他		3	

表5：1回の練習時間

	1年生	2年生	3年生
～15分	0	4	1
～30分	13	12	10
31～60分	3	0	3
1時間以上	15	23	10

#### iv) ピアノ実技に関する支援について

質問⑭は、上記のような学生が、今現在大学にどのような支援を望んでいるか、あるいは望んでいない場合は、その理由を知るための質問であった。これについては、望む学生や、望まない学生、条件付きで望む学生がいる。

当然ながら、何らかの支援を希望をする学生が多いが、望まない学生は、これ以上、ピアノに割く時間がない、あるいは理由なく支援を希望しないという者が多い。

表6：大学からのピアノ技術向上のための支援望まない理由（複数回答可）

	1年生	2年生	3年生
時間がない	4	10	2
必要がない	0	9	0
興味がない	1	5	0
理由はない（なんとなく）	2	10	2
その他	1	1	0

表7：大学からのピアノ技術向上のための支援を望む理由（複数回答可）

	1年生	2年生	3年生
経済的理由	5	9	9
時間的理由	14	18	13
その他の理由	4	9	5

### Ⅲ. アンケート調査結果の分析と考察

ここから、個別に各質問に個別にみられる傾向、学生の実態について考察したい。

- i. 学生の背景：質問③学外での稽古事経験の有無には、幼いころや短期間のものも含まれていることから、実際には、ある程度まとまった楽曲を一定のレッスンを受けて完成させ、発表会など人前で披露した経験のある者は、鍵盤楽器経験者の2割程度に止まっているとみられる。つまり、本学の学生のおよそ8割が、未経験か、それに近い学生であり、アンケートの中で、自由記述で回答された「練習方法がわからない。」「弾き方がわからない。」という答えは、「練習」でやるべき内容としてコンスタントに自己練習する方法の見えなさを示すものと考えられる。そのような学生にとっては、実習や授業での人前で弾く機会への不安感などが非常に強いまま、練習の方法もはっきりと納得されているわけでもない状態であることがわかる。

ピアノ技術の上達については基本的に、個人練習に支えられるものであることや、レッスンが練習してきた結果に応じて新たな課題が出されたり、練習方法が提案されたり、という流れであり、経験の長い者は、これをわきまえている。なぜなら、個人練習に進度の差があるのと同時に、個人の身体的差異（指の長短・開き方・利き手など様々）によって、指を痛めない練習法や、より良い運指などが変わってくるためである。そのため、十分に練習ができず、前回の課題に対して克服できたかどうか定かでないままレッスンを続けるだけでは、学生一人ひとりの技術的凹凸にきめ細かく対応することにどうしても限界がある。しかしこのような、ピアノ実技における従来の練習とレッスンの関係性が納得できていない学生は、レッスンが同時に練習の場になることを期待している。「授業内で練習の時間があれば、より練習できる。」との学生の意見は、まさにその反映であると考えられる。ここが、ピアノ実技取得における、指導者との齟齬に通じる第1点目といえよう。

- ii. ピアノ実技に関する履修状況：ここで明らかなことは、学生が学生時代の4年間に途切れることなくピアノに触るための環境確保の難しさである。確かに、「個人レッスンで通えばよい」という考え方もあるが、アンケート結果からも明らかなように、学生（特に複数免許取得希望学生）は必修が多く、時間がない。ピアノ練習を促す大きな要因となるはずの授業も、カリキュラムの都合とキャップ制で履修できず、やっと履修できても半期以上の間を置くため、ある程度戻って開始することになる。学生の「履修したかったが、定員オーバーで、別日であれば必修が被っていて履修できなかった」はその実態を示すものであり、「ピアノのレッスンを器楽

演習以外の時間もほしい。」というのは、「器楽演習」という時間だけでなく、音楽や表現に関する他の授業でも、ピアノに触れる機会をもつことを望んだものと考えられる。キャップ制や時間のなさに苦勞する学生にとっては、授業の中でピアノに触れる機会を積極的に創出していくことが必要である。

「器楽演習の時間だけでは弾けるようにならない」というアンケート自由記述の答えと共に、学生の声でよく聞かれるのは、「ピアノ実技が1年生の時にカリキュラムに組み込まれておらず、1年間で習得して来年実習に行くのが怖い。実際、12月現在で、たどたどしくしか弾けません。このまま実習のある3年制になるのがとても不安です。」という回答に代表される、継続して器楽演習が履修できないことによる技術力の低迷と、実習への不安である。器楽演習を履修できないタームがある実態、さらに、キャップ制による器楽演習履修の限界が明らかになったことから、カリキュラムにある、既存の音楽系授業や表現力演習なども用いた、ピアノ実技向上につながる要素を組み込むことの必要性が確認される。なぜなら、アンケート質問⑦「授業があることで、練習時間に影響がありますか」という質問に、「ある」と答えた学生は一定数存在するからだ。しかしながら、筆者が担当する「表現（音楽）」以外、それに相当する授業は、現在はないため、次回のカリキュラム作成時に対応が必要であると考えられよう。キャップ制があり、時間に追われている学生たちにとって、新たな時間をとって練習に充てる可能性は低い。これは指導力の問題ではない。いくら指導力が高く、学生も重要性を認識したところで、採用試験でもピアノ技術が問われなくなってきつつある昨今、限りある時間は採用試験に出る内容に力を投入することになるのは、当然の流れであろう。

また、器楽演習を履修しないとの学生の回答を見ると、2年生の答えは、「時間がない」「興味が無い」などが、中心となっている。これは、進路への関心がまだ高まっていないためとも考えられる。この傾向は、先行研究との比較でも明らかなどころでもあり<sup>5)</sup>、アルバイトや部活、サークル活動などに追われる日常を送っていること、また、その時間を使う優先順位が学生自身の興味関心を中心に形成され、ピアノへの興味関心より強いものがある場合、ピアノを練習したり重要視したりすることが後回しになっていくことが想像される。しかし3年生になると、すでに実習に行き、さらに次年度にも実習を控えているため、前回の実習での経験をふまえ、ピアノ技術の重要性や、向上したいと思う傾向が高まるものと考えられる。

- iii. ピアノの練習状況について：質問⑦からは、ピアノの授業の有無が練習に影響すること、また、質問⑧の練習回数の集計に「テスト前のみ」と答える学生が一定の割合でいることから、学生達にとって、授業内で器楽演習以外にピアノ実技を扱うことが、すでに述べたようにピアノの練習根拠に大きく影響する傾向がはっきりと示されている。一方で、練習1回あたりの時間数を見ると、回数が少ないにも関わらず、1時間以上練習する学生がどの学年においても最多である。

この数字から、学生がコンスタントに練習せず、1回にまとめて練習するスタイルを持つことがわかる。この方法は、ピアノ技術の向上には問題があると言えよう。ピアノ技術は単純に運動能力の面もあり、いくら長時間練習したとしても、数日開ければそこでの学びは大きく後退し、またほぼ前回の練習前の状態から始めなければならない。つまり学生は、いつまでも「できない」ところから始めることになり、それが「苦手」意識のスパイラルと強化をもたらすことになるのである。15分ずつでも、毎日やる方が、1週間に2回ほどまとめ

<sup>5)</sup> 先行研究では、「練習できない理由として最も多かった回答が、「アルバイトに忙しい」であった。「その他」と回答した27人のうち15人が、「部活等、〇〇が忙しい」と記述しており、「アルバイトに忙しい」と合わせて忙しさを理由として回答した学生は67.6%と7割近かった。」(市橋・安田2017, 58)とあり、教職課程に在籍する学生の忙しさが共通することがうかがえる。

て1時間やるよりも効果的であることは、指導すべきであろう。

先行研究からもこの傾向が本学特有のものではないことは先述した。最近の学生が育ってきた稽古事事情や、複数免許取得を掲げる教員養成校のカリキュラムの実情などを考慮すると、他の教員養成校の抱える課題にも通じると考えられる。つまり、複数免許取得を是としながら、そのためのカリキュラムは学生が準備の時間を十分に取れないまま進んでいくという、矛盾のある中で教員養成が行われている実態に行きつく。

- iv. ピアノ実技に関する大学からの支援について：本アンケートで明らかになったのは、大学での何らかの支援を望む学生がいるとともに、はっきりとした理由なく支援を必要としない学生が一定数いる、ということである。

支援を必要とする学生は、「大学外で習いたいが、金銭的に余裕がないため、もっと学校で習いたい。」や「家に帰ってからや、空きコマの時間があまりなく、ピアノの練習時間が無いので、ピアノの授業を増やして欲しい。」「選択だと、人数が限られ入れないため、器楽演習を必修にして欲しい。」など、学生の置かれている環境による切実なものが多い。一方で、「単位がある授業であれば、望む。」や「授業内で練習の時間があれば、より練習できる。」といった、「個人練習」を「学校で授業中に」やりたいという、自分の都合を率直に述べる意見もある。このあたりは、どこまでが大学という高等教育機関での教育範囲であり、さらに「単位」に代表される高等教育機関のシステムであるかを、学生たちがどこまで理解しているのか、ということもあろう。

支援を望まない学生は、「自分で習いにいこうと考えるから。」「個人でも練習できるから。」というように、ピアノが嫌なわけではなく、むしろ積極的にピアノに取り組もうとしている学生も多い。これには、「授業が詰まりすぎているから。」という理由や、他にも学内での指導によるピアノ技術向上の限界を自身で認識した場合もあると考えられる。

「志望する」「志望しない」によらず、練習を自主的にではなく「大学システムの中で」こなしたいと考える学生の姿は、ピアノ練習の必要性が、個人のタイムマネジメントの優先順位において低いことを示しているとも考えられる。学生が自覚している器楽演習の必要性が、どのような根拠によるものでどのような位置づけなのかは、今後見極めていくべきものであろう。ここから、やみくもに大学がプログラムを先に設定するのではなく、学生側のニーズや可能な環境をリサーチした上で、教員側の考えとすりあわせ、プログラムを立ち上げることが重要性であることがわかる。

#### IV. 終わりに：自由記述にみる、「困りごと」

本学において、ピアノ技能をめぐるアンケート調査を行ったのは、初めての試みであった。ピアノの実技に関しては、幼稚園・保育園での実習では真っ先に指摘される技能である一方で、先述したように教員採用時には選択されたり除外されたりなど、学生の側にとっても力の入れ方を苦慮するものであると言える。そのような中、多くの学生が、ピアノ実技についての不安を具体的に聴かせてくれた。自由記述には、「幼稚園の教諭・保育士の合格率を上げたいのなら、大学が支援すべき。」という、大学の成長戦略においてピアノ技能を位置付けるような内容もある。

学生からの日常的な意見を受け、アンケート結果を見て改めて確認できたのは、①音楽系授業担当者と現代の学生との、技能面における理解の齟齬、②学生の置かれている時間や場を含めた環境の限界、③現行の教員養成課程の課題、といったものであった。

①については、音楽科目を担当する教員の多くはピアノやその他の楽器などを、小さい頃から学んでいるのに対

し、アンケート結果からも明らかなように、本学ではレッスン→練習→レッスンのサイクルが経験としての定着が低く、読譜の困難さからも個人練習が非常に難しい実態がある。学生にとっては、今後のキャリア形成にピアノ技能は必要であることは理解できても、基本的な一步を継続させる「読譜力」や「見通し」を立てにくい。それは、楽譜の意味についても言え、学生はバイエルから主要番号を抜き出して課題とされることに不安を覚えている。それは、番号が飛ぶことによって、突然難しくなったり、既習事項をどのように活用したら良いのかがわからないということから起こっていることが、証言から確認できた。バイエルは練習曲集であるため、曲集内の練習のテーマが異なるいくつかのセクションの中で、主要曲を選んで課題とする結果、課題番号が飛ぶのであるが、新しいセクションではまた新しいことをやるので、難しい印象を受け、いつまでも暗中模索している感を持っているのである。その辺り、つまり各セクションの練習テーマを説明し、セクションの主要番号以外でも練習してテーマを強化して習得していくことができるなど、教材の持つ意味を説明し、理解を促す指導が必要と考えられる。「練習ありき」ではあるが、その練習とレッスンとの関係性の説明や、現在やっている練習曲と既習曲や今後の練習曲との関わりなど、大学生ならではの教育的配慮が必要と思われる。

②学生の置かれている時間や場を含めた環境については、③現行の教員養成課程の課題とも関連するものである。複数免許の取得を希望とする学生は、特に非常に忙しい。大学の授業だけでなく、その上に生活のためにアルバイトをしたり、サークル活動をしたりしている。大学の教育は、授業だけで行われるものではなく、本来、学業と共に様々な社会と責任をもって主体的に関わるトレーニングの場である。本学学生はさらに、教育実習だけでなく、ボランティア活動もある。これらは、学外で活動するだけでなく、事前事後に様々な書類を作成しなくてはならない。現実的に時間が無いのである。

教員に幅広い教養を付ける場であるはずの大学で、学生達は課題に追われる日々を送り、熟慮よりは「要領」を求められ、「即席」で「最小限の努力」で、実習や教員採用試験に必要な「最小限の技能」を身につけたいと思っている。

学生を送り出す先の現場は、ピアノの技能は教員免許を取得するプロセスで、「ある程度できているもの」として採用試験からピアノ技能を外し、市場では「楽譜が読めない」教員用の参考書も売り出されている。『学習指導要領』や『幼稚園教育要領』には、ピアノについての言及が一切ないことは先にも述べた。今後小学校においては、英語やプログラミング学習といった新しい学びが進む中でも、音楽科教育の重要性は変わらない。人間が根源的に持つ、自他とのコミュニケーションツールであるからだ。しかし、時代の流れの速さが指摘されて久しい現代にあって、従来の音楽科教育を前提とした授業や、「必要」とされるピアノ技能は果たしてこれからも存在するのか、存在するとすればどのようなものなのか。新しい時代を生き抜く力を育む学校教育に資するためにも、ピアノ技術と音楽科授業、また初等科教員養成課程における学生の取り組みについては、再考の時期を迎えていると思われるし、現状のひずみはどこかで是正されなければならないものであろう。

## 参考文献

- 1) 市橋佳明・安田万里子「ピアノ実技に関する実態分析と指導法の方向性」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部 教育実践研究』第3巻第1号 2017年 55-65頁
- 2) 木村次宏・篠原友里「小学校教員養成段階におけるピアノ基礎技能習得の意義-学校現場において求められる音楽的資質能力の育成を目指して-」『福岡教育大学紀要』第67号 第6分冊 2018年 1-8頁
- 3) 安田万里子「保育者のピアノ実技に関する実際」中部学院大学・中部学院大学短期大学部 教育実践研究』第

3巻第2号 2018年 61-68頁

- 4) 文部科学省『幼稚園教育要領 平成29年告示』
- 5) 文部科学省『学習指導要領 平成29年告示』

### 報道記事

- 1) 「熊本県教育委員会は、今夏に実施する2020年度教員採用試験から、小学校教諭などの実技試験（体育、音楽）を廃止することを決めた。」「小学教員採用の体育・音楽実技を廃止 熊本県教委 志願者増を狙う」『西日本新聞』、2019年1月25日6時39分。<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/481777/>（2019年12月29日閲覧）
- 2) 「遠方からの受験者に配慮し、採用までに行う試験の日数を5日間から4日間に減らすほか、小学校の教員試験で「水泳」「オルガン」「体育」の3つの実技試験すべてが必須だったのを、1つを選択する方式に変更しました。」「教員採用試験受けやすく見直し」2019年12月29日0620191229/2000023826.html（2019年12月29日閲覧）
- 3) 「都道府県教育委員会などが2018年度に実施した公立小学校の教員採用試験で、競争率の全国平均は2.8倍となり、バブル景気の影響で民間就職が好調だった1991年度と並び、過去最低だったことが23日、文部科学省の調査で分かった。」「小学校教員の採用、競争率2.8倍で最低バブル期並み」『日経新聞』2019年12月24日朝刊、38面。
- 4) 「小学教員採用の体育・音楽実技を廃止 熊本県教委 志願者増を狙う」『西日本新聞』、2019年1月25日6時39分。<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/481777/>（2019年12月29日閲覧）。